

# 発話における省略とその解釈

甲斐ますみ\*

キーワード： 省略, 情報ベース, 主題, 解釈, 発話

## 要旨

本稿では、話者と聞き手の存在する発話のやり取りの中で起こる省略現象に着目し、発話において、主題と主題以外の名詞句が如何にして省略可能となるかを考察する。

本稿では、話者と聞き手はともに、発話の進行にしたがってオンラインで「情報ベース」という概念スペースを構築し、そのベーススペースを活用することによって話者は文中の要素を省略し、聞き手は文中の要素が省略された発話の解釈を行うことが可能になると仮定する。情報ベースは、発話の現在において話者によって活性化された情報の集合体であり、談話の進行につれて設定されるものである。

ある話題のもとで、話者は活性化した情報を情報ベースにインプットしていく。情報ベースにインプットされた情報要素は、談話の展開によって前景化され、心理的トピックとなることがある。その心理的トピックとなった情報要素を中心として行われる一連の発話は、様々なレベルで働クリンクによって結束される。その際、一連の発話は、明らかなリンクがあればあるほど、そしてリンクが多ければ多いほど結束度が強くなる。

こうして情報ベースにインプットされ、談話の展開によって前景化された情報要素は、再度言語化して明示化しなくとも話者、聞き手ともにアクセス可能であり、従って省略可能となる。ただし、発話内容が変わり、話題が変換する場合は、それまでの発話の流れの中で既出であり、一度情報ベースにインプットされた情報要素であっても省略は不可能となる。

## 1. はじめに

日本語は省略の多い言語だと一般的に言われる。その傾向は、話者と聞き手の存在する発話のやり取りによって作り上げられる談話<sup>1</sup>において更に強まる。それ故、日本語の学習者はこの省略という技法をうまく活用しなければ会話のやり取りの中で不自然さを生じさせる。では、省略とは一体何であろうか。我々は自分たちの認識、知覚、情報等を言語形式に反映させ、文を産出

\* KAI Masumi: 岡山大学留学生センター講師。

<sup>1</sup> 本稿の「談話」という用語は南(1981)の定義に従うものである。

するが、その産出された文の命題において、命題を構成するのに必須の要素が何らかの原因で言語化されていないもの、それを本稿では「省略」と呼ぶことにする。すなわち、話者と聞き手の存在する発話のやり取りにおいて、話者の視点から言えば、ある事態や状況を言語化するのに必要な命題の構成要素のうち言語化していないもの、また、聞き手の視点から言えば、ある発話を解釈するのに意味的復元が必要とされる言語化されていない要素が省略である。

これまでに省略現象を扱った先行研究は数多く存在するが、その主なものとして、小説等の書きことばを分析の対象とし、主題の機能と結束性に着目した主題省略の研究、統語理論からのアプローチによる研究、情報の新旧や視点等の機能的アプローチによる名詞句省略の研究等がある。しかし、話者と聞き手によってつくり上げられる談話を分析の対象とした研究はまだあまり行われていない。本稿では、省略は談話の構造、談話を構成する要素間の意味的つながり、話者と聞き手のもつ情報構造の三つの要因が相互に作用し、関連しあって起こる現象であると考えられる。そして、これら三つの要因をもとに「主題<sup>2</sup>の省略」と「主題以外の名詞句の省略」について考察し、これらの省略が如何なる条件の下で行われるかについて分析を試みる。

## 2. 発話のタイプと情報ベース

### 2-1. 発話のタイプ

発話には、場面依存型と文脈依存型の二つがあると考えられる。大まかに言えば、場面依存型は発話の場面に存在する物、人物、状況等の話者、聞き手の両者に視聴覚可能なものに対して何らかの発話を行うものであり、文脈依存型は、話者や聞き手の持つ情報や知識、記憶などを引き出して何らかの発話を行うものである<sup>3</sup>。では、これら二つのタイプの発話において文中の要素がどのように省略されるかについて見てみる。

### 2-2. 情報ベース

話者と聞き手が存在する発話の場において話者が何らかの発話を行う際、話者は聞き手の持つ情報量を考慮しながら発話を行う。こうした聞き手の持つ情報量に対する考慮は、文中の要素の省略に影響を与える。

本稿では、話者と聞き手はともに、発話の進行にしたがってオンラインで「情報ベース」という概念スペースを構築し、そのベーススペースを活用することによって話者は文中の要素を省略

<sup>2</sup> 本稿における「主題」という用語は、より形式面を重視した意味で用いる。すなわち、文頭におかれ、かつ、「が」「を」等の格助詞ではなく、主題を示す明示的のマーカである「は」もしくは「って」がつくことが自然な名詞を主題と呼ぶ。

<sup>3</sup> 実際の発話においてはこれら二つのタイプが組み合わされて談話が作り上げられることも多いが、本稿ではこの二つを分けて考察することにする。

し、聞き手は文中の要素が省略された発話の解釈を行うことが可能になると仮定する<sup>4</sup>。情報ベースは、発話の現在において話者によって活性化 (activated) された情報の集合体であり、談話の進行につれて設定される心理的な概念スペースである。情報ベースにインプットされる情報は典型的に、発話の現在において発話の場に存在する対象や個体、談話の中の登場物〈対象〉や登場人物〈個体〉、そしてそれらの属性及び対象と個体もしくは個体間の関係等が挙げられる。また、発話内容によっては、場所や時といった情報要素がインプットされる場合もある。情報ベースにインプットされた情報要素は、談話の流れの中で随時キャンセルされ、新しい情報要素にとって替われ得る。話者と聞き手は、この情報ベースを中心として、発話の場における知覚(物)、発話の参加者、発話場面、知識、記憶、信念等<sup>5</sup>から現在問題としている発話内容にかかわる情報を必要に応じて引き出し、活用しながら発話を行い、また発話の解釈を行っていく(下図参照)。

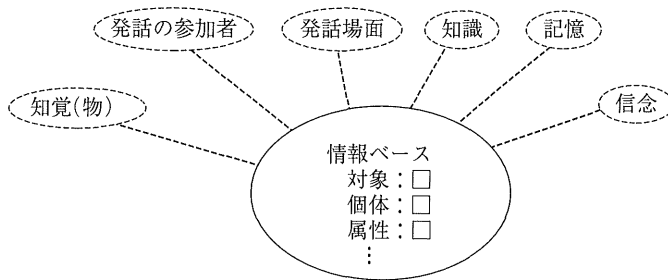


図 1

### 3. 場面依存型発話

では、以下、情報ベースという概念を用いて、場面依存型発話における省略現象を見ていく。次の例を見てみよう。

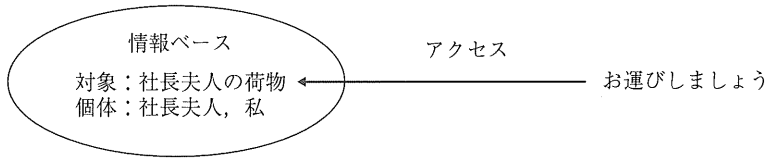
(1) 〈佐々木はデパートから出てきた社長夫人と出くわす。社長夫人は荷物を持っている〉

佐々木: お、奥様、佐々木でございます!! [φが][φを]お運びしましょう!! (釣り)

ここで佐々木の二番目の発話は、誰が何を運ぶのか言語化されていないが、解釈は一つしかありえず、それは、「佐々木が社長夫人の荷物を運ぶ」である。この発話では次のような情報ベースが活用されていると考えられる。

<sup>4</sup> 「情報ベース」という概念は、Fauconnier のメンタル・スペース理論をもとに構築したものである。Fauconnier は形式論理学で扱うことのできない指示の例を容易に扱える道具としてメンタル・スペースという概念を提示した(詳しくは Fauconnier (1994) を参照)。省略は指示の問題であることから、本稿では、この Fauconnier のメンタル・スペースをもとに構築した「情報ベース」という概念スペースを使って説明を試みる。

<sup>5</sup> こうした知覚(物)、知識などのいわば背景知識は無数のものが考えられるであろう。



場面依存型発話において情報ベースにインプットされる対象は数限りなくあると考えられるかもしれない。しかし、我々は常に自分を中心として世界を認識し、自分と関係の深いもの、また日常と異なるものを優先的に認識しやすい。例えば、その存在さえも気づかない空気であるとか建物といった情報価値の少ないものは我々の認識世界には情報として、また何か情報を付け加える価値のある対象物として認識されにくい。つまり、活性化されていない情報は情報ベースにはインプットされないと考えられる。

(1) の例において、情報ベースには「社長夫人の荷物」「社長夫人」「私」という三つの情報要素が存在するが、「お運びしましょう」という発話が「社長夫人の荷物」に、そしてそれのみにアクセス<sup>6</sup>可能で、佐々木の二番目の発話が「社長夫人の荷物を運ぶ」という解釈しかあり得ないのは、「荷物」と「運ぶ」の語彙的つながり(これについては第4章で詳しく述べる)、「お～する」という敬語表現、そして「～しましょう」という申し出表現の使用による。もし(1)の発話が次のように続いていけば、異なる解釈が行われるはずである。

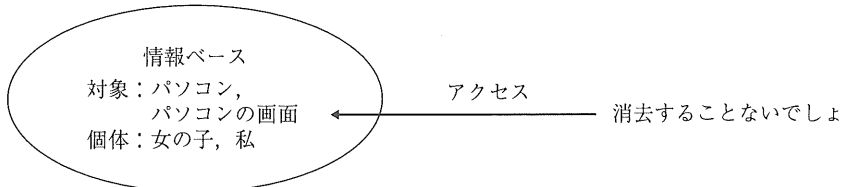
(1') 佐々木: お、奥様、佐々木でございます!! [φが][φを]お送りしましょう!!

(1')における、情報ベースの情報要素は(1)と同じであると考えられるが、「お送りしましょう」という発話は「社長夫人」という情報要素に、そしてそれのみにしかアクセスできず、「社長夫人を送る」という解釈しかあり得ないのは、「送る」という行為は「人」に対して行われるという語彙意味的なつながり、そして「お～する」という敬語表現と「～ましょう」という申し出表現の使用による。次の発話も場面依存型発話で、省略が行われる例である。

(2) 〈ロッテは図書館でいつも見掛ける女の子がパソコンで何かしているのを見て、近づき〉

ロッテ: あなたも、マルゴット・ランガーについて調べてるの? あー、何もあわてて[φを]消去することないでしょ!  
(MON)

この発話では、次のような情報ベースが活用されていると考えられる。



<sup>6</sup> ここで「アクセス」という用語は、結びつくという意味でインフォーマルに使っている。

「消去することないでしょ」という発話が情報ベースの中の「パソコンの画面(より具体的にはパソコン画面上の、マルゴット・ランガーについて書いたもの、もしくは記事)」に、そしてそれのみにアクセス可能で、「画面を消去する」という解釈しかあり得ないのは、「画面」と「消去する」の語彙意味的つながり、そして「～でしょ」という聞き手目当ての表現形式の使用による。

では、情報ベースにインプットされていると話者が仮定する情報であれば、如何なる要素もアクセス可能で、従って、省略可能であろうか。

情報ベースの情報要素にアクセス可能なのは、場面依存型発話であれば、発話の場に存在する対象や個体についての描写等の発話が、リンクの存在(第4章で詳しく述べる)や明らかに視聴覚可能である等の理由から解釈の可能性が一義的でしかあり得ない場合のみである、これを「唯一性」と呼んでおくが、唯一性は場面依存型発話であれ、文脈依存型発話であれ、ともに省略を支配する最も重要な、かつベースとなる原理である。

次のように、たとえ発話の場に存在していても、聞き手との共有知識として情報ベースにインプットするには情動的価値が低く、そのため聞き手にも共有された情報要素として情報ベースにインプットされていると仮定しにくいもの((3)の例)、もしくはアクセスの可能性が二つ以上あり、唯一的でないもの((4)の例)の場合には、アクセスが不可能で、従って、省略が行えない。

(3) 〈空を見上げて〉

高いですね、空が /\*[φが]。 (水古風)

(4) 〈酒場で夢想していてハッと我に返り、横にいる人に向かって〉

ここはどこ? なんでおまえが /\*[φが] ここにいるの? (釣り)

## 4. 文脈依存型発話

### 4-1. 心理的トピック

話者は情報ベースにインプットされている情報の中から、ある情報を前景化し、一連の発話を行うことがある<sup>7</sup>。この前景化された情報要素を「心理的トピック」と呼んでおく。談話の中で、ある情報要素が前景化されると、それに情報を付加する発話が引き続き行われる。次の例文を見てみよう。

(5) 私はきのう太郎からプレゼントをもらいました。プレゼントはかわいい指輪でした。

この発話において心理的トピックとして前景化される情報要素は「プレゼント」である。心理

<sup>7</sup> 「ことがある」としているのは、例えば挨拶表現であるとか、発話内容によっては、心理的トピックを持たないものもあるからである。なお、情報ベースにインプットされた情報要素は、潜在的に心理的トピックとなり得る地位を与えられる。

的トピックとは、発話において話者が最も述べたいこと、最も描きたいことの中心的対象であり、話者はそれに対して何らかの叙述を引き続き行う。つまり、叙述が何についてなされるか、のその「何」に当たるものである。心理的トピックは主題になることもあり、実際、叙述を付け加える中心的対象であるため、主題の位置にくることが多いが、主題とは別物である。心理的トピックは文レベルで決定されるのではなく、概念レベルで決定され、具体的には文中で名詞句として言語化される。心理的トピックは「を」格や「が」格を伴って現れることもある。例えば、次の発話において、前景化される心理的トピックは「ドラマ」である。

(6) 昨日、9時からのドラマを見ましたか。私はあのドラマを毎回楽しみにしていましたね。  
あのドラマは本当に面白いですよ。

では、以下、この心理的トピックが省略と如何に関わっているかを見ていく。

#### 4-2. 文脈依存型発話と情報ベース

次の例を見てみよう。

(7) 〈みち子はダンの息子ケニーを夕飯に誘った後、家に送ってきて、ダンと話をする〉

みち子<sub>1</sub>: ケニーの部屋に親子三人の写真があったわ。きれいな人ですね。奥さん…

ダン<sub>1</sub>: [φ は] [φ を] 今でもきれいな人だと思っています…。でも…お互い忙しくて、相手を思いやる時間がなさすぎました。

みち子<sub>2</sub>: [φ は] 今でも連絡は?

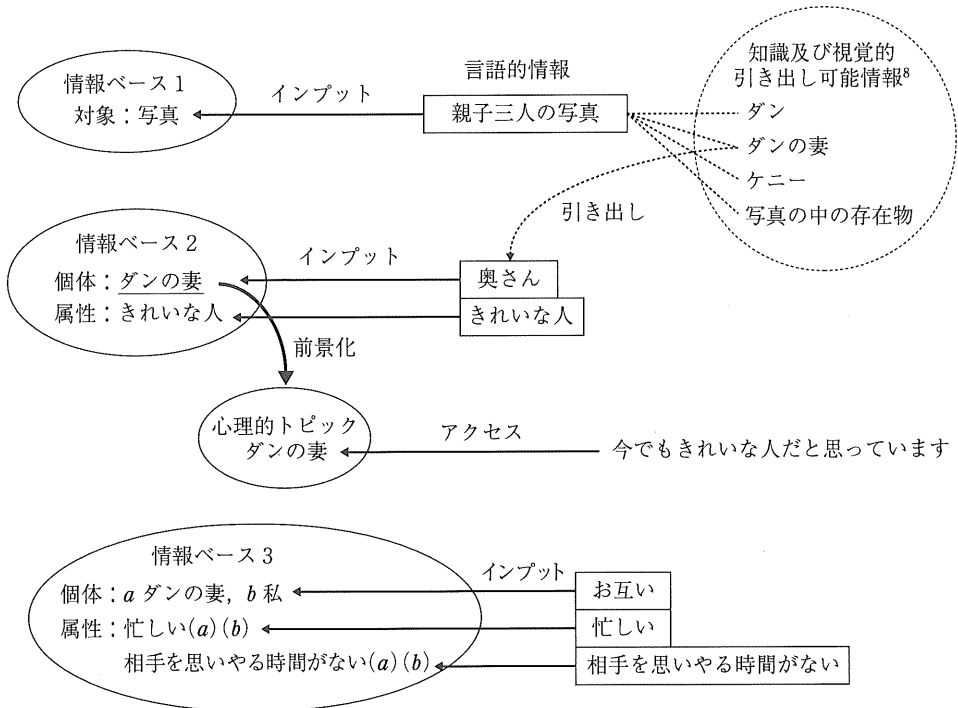
ダン<sub>2</sub>: 二人はケニーの母であり父ですからね…

みち子<sub>3</sub>: きっと別れた理由なんて、他の人には /\* [φ には] 分からないことなのでしょうね。  
(釣り)

これら一連の発話では、次のような情報ベースが活用される。(次頁参照)

みち子<sub>1</sub>の発話によって情報ベース1,2が構築される。そして談話が展開し、ダン<sub>1</sub>の発話によって情報ベース2における情報要素「ダンの妻」が前景化され、「ダンの妻」に関する発話が引き続き行われる。前景化された心理的トピックに対するダン<sub>1</sub>の「今でもきれいな人だと思っています」という発話は、みち子によって与えられた情報ベース2を活用しているため、情報ベースにインプットされた情報要素にアクセス可能で、従って「きれいな人」という属性を持つ個体(ダンの妻)が省略可能となる。その後、「でも」以下のダン<sub>1</sub>の発話により、情報ベース3が作られ、それに続く一連の発話はこの情報ベースを活用して行われる。(7)でみち子<sub>3</sub>の「他の人」という要素が省略不可能なのは、情報ベースに「他の人」という情報要素がインプットされていないためであると考えられる。情報ベースにインプットされていない情報要素はアクセス不可能であり、従って省略不可能である。

では、(7)の例を(7')のように変えてみる。



(7') みち子: ケニーの部屋に親子三人の写真があったわ. 昔の家? [φ] 素敵ね.

ダン: 今でも [φに] 父が住んでいるんですよ. [φは] 古いんですけどね.

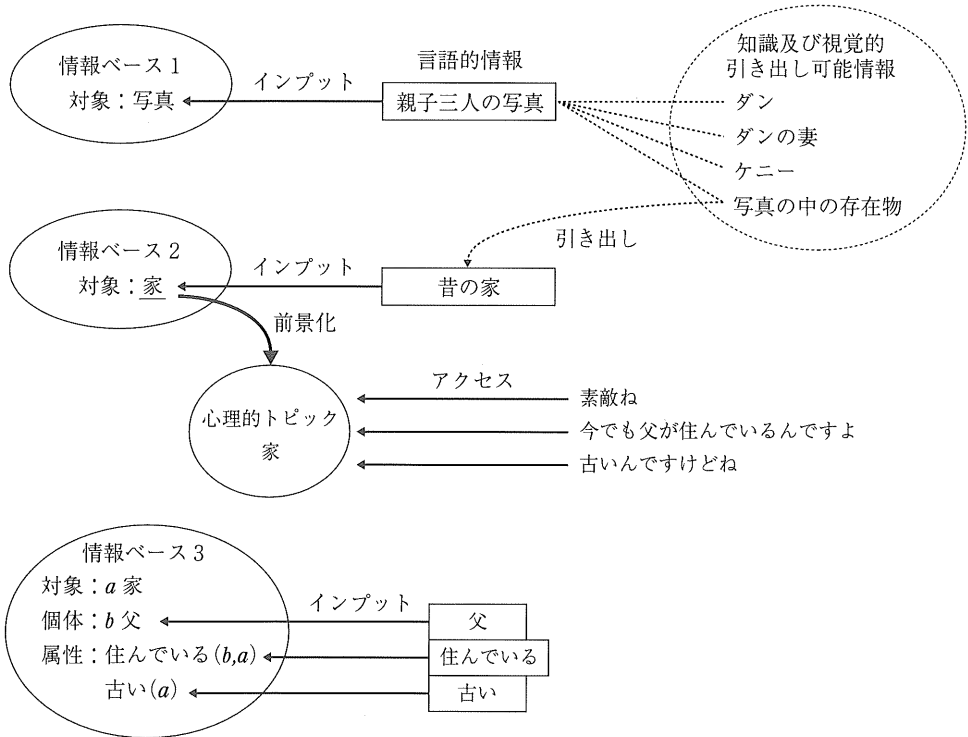
a. 私達は /\*[φは] [φを] 補修して, [φに] 住んでいたんです.

b. 父は / [φは] [φを] 補修して, [φに] 住んでいます.

ダンの発話における a と b の省略可能性の違いは次のような情報ベースによって説明できる (次頁参照).

みち子の「昔の家?」という発話によって情報ベース 2 に情報要素がインプットされる. その後みち子は「家」という情報要素を前景化し, それに続くダンの発話はみち子の発話によって構築された情報ベースを活用し, 前景化された「家」という情報要素にアクセスすると同時に, 情報ベースに新しい情報要素「父」「住んでいる」「古い」をインプットする. そして, インプットされている情報要素にアクセスするダン b. の発話は省略が可能であるが, アクセスしようとする情報が情報ベースにインプットされていない a. の発話はアクセス不可能であり, 従って省略が不可能となる.

<sup>8</sup> 引き出し可能情報は, 既に話の中に出ている概念に関連する情報である. この情報は, 談話が次にどのように展開されていくかの談話の組み立てに関わる.



#### 4-3. 主題の省略

談話における省略の可否は、情報ベースという心理的概念スペースに加えて、談話の意味内容的構造が関わっている。

ある情報要素が前景化されて、心理的トピックとなり、その情報要素に関連した一連の発話が行われる場合、そしてかつその心理的トピックが主題の位置にきて、その主題に対し何らかのコメントを次々と付け加えていくという談話構造を持つ場合には主題は省略される方が自然である。

##### (8) <つめに色を付ける薬を開発中だという部下の報告を聞いて>

上司: いい着眼だな、色をはげるといこともない。

部下: その過程で、ばかげた薬の発見がなされました。[φは]一時的に頭がおかしくなる作用のあるものです。[φは]まさしく、ばかげた薬。[φは]何の役にも立たない。(黄)

##### (9) <自分の父について話す>

娘: 父は三十年前、事業に失敗し、ひどい暮らしになってしまいましたの。そのため、[φ



は] その時生まれたばかりだった男の子を、手放さなければならなかったそうですわ。でも、その後[φは] 死物ぐるいで働いたおかげで、今では財産もでき、何の不自由もなくなりました。(財)

(10) 森野: キャッチボールの依頼人は、あの男だったのか。

良子: ええ、[φは] 古くからのお客さんのの。

森野: [φは] 守君の父親なんだろう? (ケ)

(8) で前景化された心理的トピックは「ばかげた菓」であり、これに対して二文目以降コメントを付け加えていくという談話構造になっているため、主題が容易に省略される。(9) で前景化された心理的トピックは「父」、(10) は「あの男」であり、これらの例においても主題として前景化された心理的トピックについて何らかのコメントを付け加えていくという談話構造を持つため、主題の省略が行われる例である。

一方、談話が展開し、発話内容が変わる、つまり話題が変わる場合には主題の省略が不可能となる。これは、主題の明示が、別の話題に移ったことを示すシグナルとなり、話者は聞き手に新しい話題の始まりを知らせ、新しい話題のもとでの心理的トピックを聞き手に共有させようとするためである。そしてその場合、たとえそれまでの発話の中で既出で、一度情報ベースにインプットされた情報要素であっても、新しい話題に移る場合には主題は省略できない。

ここで話題とは、我々がまとまりのある談話を構築しようとする際、ある命題 (proposition) を中心とし、それに対して何らかの情報を付加する、もしくは何らかの情報を求めようとするが、その中心となる命題である。ある発話が命題と何ら意味内容的関係を持たない場合、話題からそれた発話、もしくは次の話題への移行ととられる<sup>9</sup>。

(11) <誠が好きになった「たか子」という女性がどんな人が説明している>

誠 : 彼女はご主人を交通事故で亡くしたんだ。

山岡: そうか、で [φは] 亡くなったご主人に操を通すためにお兄さんと結婚できないと…

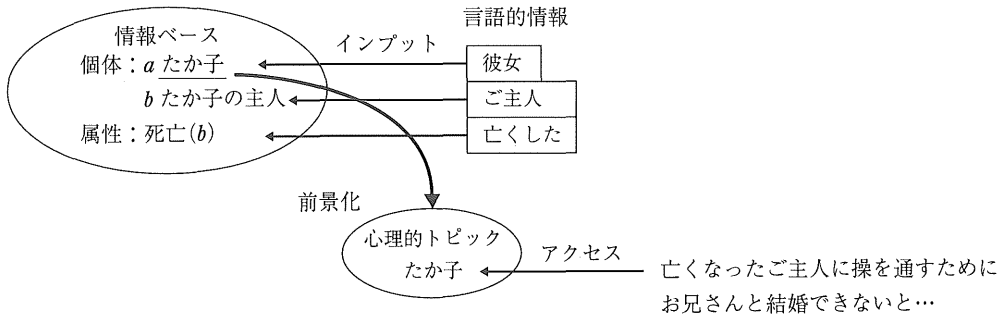
ゆう子: たか子さんて /??[φ] おいくつなの? (美)

(11) の発話では以下のような情報ベースが活用される。(次頁参照)

前の発話に既出であって情報ベースにインプットされたはずの「たか子」という情報要素がゆう子の発話において省略が難しいのはどうしてであろうか。上の誠と山岡の発話は、「たか子が誠と結婚できない事情」という話題のもとで「たか子」という情報要素を前景化し、心理的トピ

<sup>9</sup> 本稿での「話題」の定義は Keenan & Schieffelin に従う。Keenan & Schieffelin は “discourse topic” という用語を用い、次のように述べている。

「We take the term discourse topic to refer to the PROPOSITION (or set of propositions) about which the speaker is either providing or requesting new information.」(pp. 338)



ックとして一連の発話を行っている。ところが、ゆう子の発話では話題が「たか子の年齢」に移っている。このように、話題が変換する場合には、例えそれまでの発話の中で情報ベースにインプットされたはずの情報要素であっても省略不可能となる。次も話題が変換するために主題が省略不可能となる例である。

(12) 〈モグリで手術をする少女に会って〉

天馬<sub>1</sub>: どこでこんな技術, 覚えた?

少女<sub>1</sub>: 父が医者だったから….

天馬<sub>2</sub>: だった…?

少女<sub>2</sub>: 父は / \* [φは] ベトナム人医師で, 私を連れて東ドイツに留学…そのまま残って小さな診療所を開業してた…。でも, 壁が崩壊して…。 (MON)

(13) ほら, 泡がつぶれたりせずびったりとビールの上を覆っている。この泡の / [φの] キメの細かさがその秘密だ。この泡は / ? [φは] ビールの香りが抜けるのをふせぎ, これ以上ガスが発散するのもおさえる。 (美)

(12)において、話題が「父の過去」に移った少女<sub>2</sub>の発話では、主題である「父」が前の発話で既出であっても省略されにくくなる。(13)では、第一、二文目の発話は目前のビールの泡の状態について述べているが、第三文目では「泡の効用」に話題が移っているため、「泡」は前文で既出であっても省略することが難しい。

このように、主題の省略、非省略は情報ベースという概念の他に、話題の変換という要因が関わっており、たとえ情報ベースにインプットされた情報要素であっても、話題が変わる場合はアクセスは不可能で、つまり省略は行えず、一方、話題が変わらず、同じ話題が引き継がれている場合には、情報ベースにインプットされた情報要素にアクセス可能で、従って省略され得るということが言える。

### 5. 省略とリンク

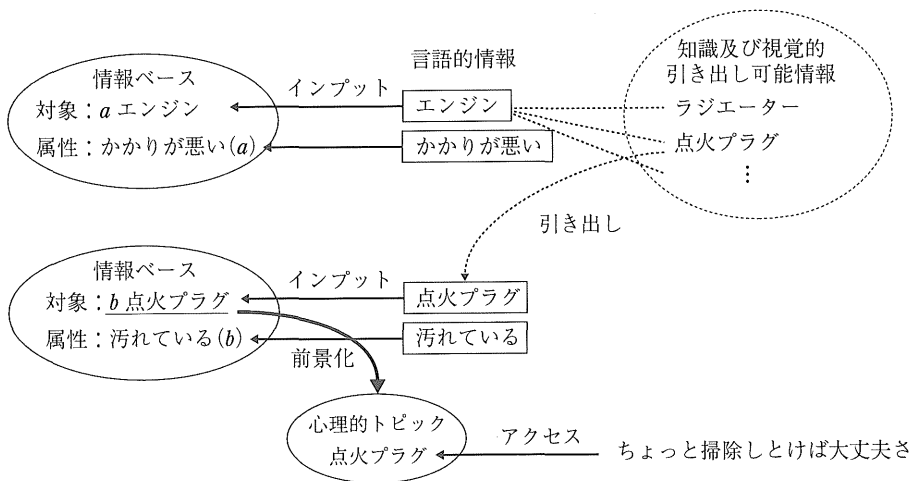
話題の変換は、主題の省略だけでなく、その他の名詞句の省略にも影響を与える。次の例を見よう。

(14) A: エンジンのかかりが悪いんですけど。

B: ああ、点火プラグが汚れているだけだよ。[φを] ちょっと掃除しとけば大丈夫さ。

(泣いた)

(14)の発話の情報ベースは以下のようにできていると考えられる。



(14) Bの発話において、「点火プラグ」が前景化され、心理的トピックとなっている。「点火プラグ」は一文目では主語の位置に現れ、次の文では目的語の位置に来て、しかも省略されている。つまり、アクセス可能であるが、このようなアクセス可能性は、主題の省略の場合と同様に、情報ベースにインプットされた情報要素か否か、また、一連の発話が同じ話題のもとに行なわれているか否かという要因に左右される。では同じ話題か否かというのは如何にして決められるのだろうか。一連の発話が同じ話題のもとに行われる際、文の構成要素間、もしくは文と文との間に何らかのつながりや関連性が存在する。そうしたつながりや関連性は次のようなリンクによって形成されると考える。

(ア) 論理的リンク: 行為と行為の対象の結び付き、主体と行為の結び付きなどの命題内の要素の意味論理的関係としての結び付き

(イ) 語彙的リンク: 同一語句の反復、反意性や同一性といった意味的に対応する語句の反復、「なめるー飲む」などの意味的グループを形成する語句の反復に

よって作られる結び付き

- (ウ) 知識・概念的リンク: 「カキ鍋—カキ」等の関係に見られる認知, 文化, 習慣, 知識等に基づく結び付き, 「壊れる—修理する」等の間に認められるような関連性, といった結び付き
- (エ) 情報のリンク<sup>10</sup>: 原因と結果, 情報の付加などの文間レベルで実現される意味論理的結び付き, 視点の一貫性など

(14) では「汚れている—掃除する」という知識・概念的リンクによって一連の発話は結び付けられ, 同じ話題のもとに行われている発話と解釈されるために, 文中の要素の省略が可能となる. すなわち我々は, 「汚れているものは掃除する」という常識や観念を持っている. またここでは, 「エンジンのかかりが悪い原因は点火プラグの汚れである」という事実, そして「その点火プラグを掃除すればエンジンのトラブルは解消する」という知識の活用, また「掃除する」という行為に結び付くものは掃除する対象であるという論理的リンクによって, 発話の中の要素が結び付けられ, 関連付けられ, 「点火プラグ」の省略が可能となる.

以下, その他様々なリンクによって文中の要素が省略される例である.

- (15) どうも, わしは薬とか医者というものが好きでない. だいたい, 毎日きまった時刻に, [φを]必ず飲まなくてはならないというのは, 面倒くさい. (効薬)
- (16) すっかりおもちが届いていたのを忘れてて… [φが]少し固くなりすぎちゃって, [φを]切るのが大変だわあ. (新)
- (17) <ある女優が飼っている「キッピー」という名のペットの様子がおかしくなって>

女優<sub>1</sub>: さっきね, キッピーちゃんに香水をかがせたのよ. [φは]とても喜んだので, [φに]好きなだけなめさせてやったの. [φは]とうとう, ひとビン飲んじゃったわ.

助監督: それで, [φは]どうしましたか.

女優<sub>2</sub>: そしたらね, [φが]なんだか弱ってきたのよ. あたし, あわてて救急箱のなかにあったお薬を [φに]飲ませてやったの. だけど, ちっともきかないのよ. [φを]早く元気にさせようと, [φに]たくさん飲ませてあげたのに… (隊員)

(15) では「薬」が前景化され, 心理的トピックとなっている. そして「好きではない—面倒くさい」という関連性を持つ語彙の使用, また「飲む」という行為と結び付き得るものは飲む対象であるという論理的リンクの存在によって「薬」が省略可能となる.

(16) では「おもち」が心理的トピックとなっているが, 「おもちが届いていたのを忘れる」ということが「何日もそのまま放置しておく」ということを意味的に含意しており, そして, 「何日も放置すればもちは固くなる」という知識や事実, 「固くなれば切るのが大変である」とい

<sup>10</sup> 情報のリンクは談話の構造にもっとも関わりがある.

う帰結や事実という一連の含意や知識に基づくリンク、また「固くなる」という属性と結び付き得るものは「固くなる」という属性を持ち得る対象であるという論理的リンクによって「おもち」を省略することが可能となる。

(17)では、「キッピちゃんの異変」という話題のもとで一連の発話が行われており、「キッピちゃん」が心理的トピックである。そして、一連の発話の中で「キッピちゃん」という要素が文中のさまざまな位置に現れるにも拘わらず、省略可能となっている。ここには、「かがせる」「なめさせる」という発話者側の視点から事態を描いていることを示す語彙表現、「なめる一飲む」という意味的グループを作る語彙的リンク、「弱る一菓を飲ませる」という知識・概念的リンクの存在、「飲ませる」の反復使用による語彙的リンクの存在によって一連の発話が結束し、「キッピちゃん」の省略が可能となる。このように一連の言語表現において複数のリンクが存在することがあるが、その際、リンクが多ければ多いほど発話間の結束度は強くなると考えられる。

一方、談話が展開し、話題が変わる場合は、以下のように心理的トピックとして前景化された文中の要素であっても省略が難しくなる。

(18) 〈精神分析療法の治療を行っている水瀬博士のもとを一人の女性が訪れる〉

女性<sub>1</sub>: さっきのお電話でお話しましたが、あたし、殺してしまったのですわ。

水瀬<sub>1</sub>: ああ、そんなお話でしたね、で、殺したのは、なんでしたでしょう。

女性<sub>2</sub>: 豚よ。

水瀬<sub>2</sub>: で、豚が /\*[φが] 死んで、どんなお気持ちですか。 (暑)

(19) 〈為朝は相原に妻が出て行ったときのことを聞かれて〉

相原<sub>1</sub>: [φは] 行くとき、何か言いましたか？

為朝<sub>1</sub>: いいえ、[φは] なんにも言いません。[φは] 突然いなくなっちゃったんです。あのときは、ルミと二人で途方に暮れました。

相原<sub>2</sub>: ルミは /\*[φは]、為朝さんがムショに入って、一人ぼっちになっちゃったんですね。

為朝<sub>2</sub>: 私は、ルミを /\*[φを] 残していくことに、ずいぶん悩みました。 (ぼくら)

(18)において、水瀬<sub>2</sub>の発話は「豚」を心理的トピックとして、「豚が死んだ時の気持ち」という別の話題に移っている。そのため、女性<sub>2</sub>において「豚」は一度言語化されており、既出であっても、また、「殺した一死んだ」という語彙的リンクの存在があっても、「豚」は省略不可能となる。

(19)では、相原<sub>1</sub>と為朝<sub>1</sub>の発話では「妻」を心理的トピックとして一連の発話を行っているが、相原<sub>2</sub>では「ルミ」を心理的トピックとして前景化し、「ルミの状況」に話題を移すため、「ルミ」は省略不可能となる。続いて、為朝<sub>2</sub>の発話における心理的トピックは、同じく「ルミ」であるが、話題が「その時の私の気持ち」に移るため、「ルミ」は既出であっても省略不可能となる。

なお、4-3 で見た (8)~(10) の主題の省略の例は、一連の発話が情報のリンクによって結び付けられている。(8)~(10) の例は以下のような談話構造になっている。

主題+コメント1  
+コメント2  
+コメント…

この構造は、心理的トピックである一つの主題に対して情報を次々と付加していくという文間レベルで実現される意味論的結びつき、すなわち情報のリンクを持つために、主題の省略が行われる例である。リンクの存在は主題の省略にも影響を与え、情報のリンク以外にも、様々なリンクが存在すればするほど省略が可能となる。

## 6. ま と め

本稿では、情報ベース、心理的トピック、そしてリンクという概念を提示した。話者と聞き手は発話のやり取りにおいて情報ベースを活用する。情報ベースにインプットされる情報要素は、談話の流れの中で前景化され、心理的トピックとなることがあるが、こうしてある話題のもとで前景化された心理的トピックを中心として行われる一連の発話は、さまざまなレベルで働くリンクによって結束される。そして、明らかなリンクがあればあるほど結束度が強くなる。この時、情報ベースにインプットされ、前景化された情報要素、すなわち心理的トピックは省略可能となる。

一方、前の発話の中で既出であり、情報ベースに一度インプットされた情報要素であっても、しかもそれが発話の場に存在する物や人であっても、話題が変換する場合はアクセス不可能となり、従って省略が行えない。それは、情報要素を再言語化することによって、話者は新しい話題に移ることを聞き手に知らせ、情報の共有化を図るためである。こうした制約は主題及び主題以外の名詞句の省略の双方に並行して見られる。

## 参 考 文 献

- 甲斐ますみ(1997)「省略にかかわる談話の構造とリンク」、『日本語・日本文化研究』第7号、大阪外国語大学日本語講座。
- 久野 暉(1978)『談話の文法』、大修館書店。
- 鈴木俊二(1983)「談話における主題の結束性」、『Sophia Linguistica 7』、上智大学。
- 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」、『文芸言語研究 言語篇』18。
- 寺倉弘子(1986)「談話における主題の省略について」、『言語』15-2、大修館書店。
- 嶋 弘巳(1980)「文とは何か—主題の省略とその働き」、『日本語教育』41号。
- (1985)「主題の展開と談話分析」、『国際商科大学論叢』第31号。

- 福地 肇(1985) 『談話の構造』, 大修館書店.  
 三上 章(1970) 『文法小論集』, くろしお出版.  
 南不二男(1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として—」, 『藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢 I』, 三省堂.

- Fauconnier, Gilles. 1994. *Mental Spaces*. Cambridge Univ. Press, 坂原茂ほか訳. 『メンタル・スペース—自然言語理解の認知インターフェイス—』, (白水社, 1996).  
 Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London and New York: Longman.  
 ————. 1985. *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semantic perspective*. Geelong, Vic.: Deakin Univ. Press, 笈壽雄訳 『機能文法のすすめ』, (大修館書店, 1991).  
 Keenan, E. O. and B. B. Schieffelin. 1976. "Topic as a Discourse Notion: A Study of Topic in the Conversations of Children and Adults (1)," Charles N. Li (ed.), *Subject and Topic*. New York: Academic Press.

#### 用例出典

- 泣いた=泣いた一平, 『ビッグコミックオリジナル』 No. 626.  
 釣り=釣りバカ日誌, 『ビッグコミックオリジナル』 No. 626, 679.  
 水古風=水古風ニッポン人のススメ, 『ビッグコミックオリジナル』 No. 626.  
 新=新年パーティ, 『ビッグコミックオリジナル』 No. 630.  
 MON=MONSTER, 『ビッグコミックオリジナル』 No. 679.  
 ケ=ケント, 『ビッグコミックオリジナル』 No. 682.  
 美=美味しんぼ, 『ビッグコミックスピリッツ』 No. 658.  
 黄=黄色い菓, 星新一, 『夜のかくれんぼ』, 新潮文庫.  
 財=財産への道, 星新一, 『ノックの音が』, 新潮文庫.  
 効薬=効薬, 星新一, 『おせっかいな神々』, 新潮文庫.  
 隊員=隊員たち, 星新一, 『おせっかいな神々』, 新潮文庫.  
 暑=暑い日の客, 星新一, 『ノックの音が』, 新潮文庫.  
 ぼくら=ぼくらのメリークリスマス, 宗田 理, 角川文庫.